

# 左 右 性 の 謎

澁 谷 久 雄

道をたすねたら、やたらに右とか左とかいつて教えてくれた人があつた。さいわい間違わずにたどり着くことができたから有難かつたが、元來右とか左とかいうことばは便利ではあるが、主体がはつきりしていないと、かえつて混乱のもとになつたりすることがある。

永い間の習慣で、体操教師が「左右」と号令をかけながら、自分ではあべこべの運動をしていても、別に不思議ではなく、野球を見るのに攻守いずれの側から見てなどと、面倒なことを考えなくても、ライトはライトで万人に通用している。新聞写真に「向つて…」ということわりがあつたり、なかつたり統一のとれない時代もあつたが、今ではその必要もなくなつた。このような訓練の行き届いたことがらだけに使用しているうちは殆んど間違もおきないですむが、盛んに複雑なところにも使用せられるので、生活上にも学問上にも不統一や混乱を来している場合が少なくない。

思想や政治面で左右の区別をするのは、由來は知らないが、赤と白、黒と白、プラスとマイナス程の意味であり、なれてもいるから問題はないが、河川の右岸左岸といい、回転方向や巻き方にまで左右を用いるにいたつては実に厄介である。

厄介だからといつて、捨てておくわけにはいくまい。世の中が進歩すれば表現法が複雑になるのは当然であるから、他に適當なことばがなければ最も妥当性のある、左右の使用法をみつめて、みんながその方向に訓練されていかなければならないであろう。

自然界には廻旋の現象が沢山あるが、これが皆左右のことばで表現されている。生物を例にとつてみると、貝類の中に巻貝といつて実によく巻いたやつがある。左右反対のものを二つ並べて出されたら、反対巻であることはわかつて、さてどちらを右巻といい、どちらを左巻と呼んだらよいか迷つてしまうであろう。

巻貝は殻頂の方から見て、時計と同じ方向に廻旋成長しているものを右巻と呼び、植物の場合は先端の方から見てきめることに一応習慣づけられているが、この捉(?)には賛成しかねる点もある。本来動植物一本であるべき筈のものが、このきめ方では動物は生長の軸を後方から、植物では前方から眺めて左右を決定しなければならぬような不統一を来しているからである。

蚊取り線香の渦巻を手にとつて左巻だと思ふのを裏から眺めると右巻になる。即ち平面での渦流には、左右に関する本質的差異を認められないのである。ところが線香の中心と、外輪の部分を両手でもつて、ばねのように少し引き伸してみると、やり方によつて、二通り(鏡に写つた像と、実体との関係)ができて、如何なる方向から見ても同じではない。これは日常使つてあるネジと同じことで、時計と同じ方向にねじると前進する本ネジと、これと全く反対の逆ネジとの関係になつている。

生物は少くとも立体構成をとつているから、上下、左右いずれの方向から、誰が見ても一つのものは同じ感覚で受け取られる筈である。呼び方を、本ネジと同じものを右巻、逆ネジと同じものを左巻とすれば、生物全体が統一されて繁雑はおこらない。勿論これ式でいくと、従來の動物はそのままで、植物は全部反対に、例えばアサガオは右巻と言うことになる。

巻貝ではケルガイの類を除くと、オーソドックなものは右巻と相場がきまつており、たまにある左巻のものには「左巻マイマイ」等と、abnormal な人の代名詞をそのままちようだいしているのもあり、左巻の少ないことがよくわかる。しかし植物では、従來の方式に従えば、アサガオを筆頭に、左巻が断然多く、スイカヅラのように右巻のものは比較的少ない。

生物界を、根氣よく整理してみたらこのような左右現象は階分沢山あるにちがいない。そのうちに自分の頭が左巻になつて来たのではないかと自問したくなるかも知れない。ところがこんな形式上の問題で頭を痛めるのは馬鹿げている。真の問題は左右性の本質にある。「アサガオの莖はなぜ左巻になるのか」簡単な問の裏に深い謎の秘められていることに気がつくのである。一般に左右性は種(species)によつて一定している場合が多く、親から子へと伝えられているようである。ここに、単なる生理学的興味から進んで遺伝生化学的問題が生れる。

アサガオは、誰が、何處で栽つても、莖は左巻となつて支柱に巻きつくし、蕾は右巻になる。明らかに遺伝現象である。この謎を如何に解くか。現象の裏に遺伝子を考え、遺伝子にはおそらく巻くことに関係のあるものと、左右を決定するものがあることを分析的に予想はしても、正攻法ではとても歯が立ちそうにも

ない。ところが未開の領域では、自由な夢と想像が許される。

化学を少し学んだ人なら誰でも承知の光学的活性物質がある。遺伝子又は、これから二次的、あるいは高次的に生じる物質が旋光性を有しておるとするならばこれに光が当つて、光の振動面が回転されると同時に、何らかの圧力が物質に与えられるのではないか。この微小な力が、左右性決定の原動力になると考えるのはどうであろう。

もつともこれは夢の又夢であるかもしれない。そしてあとに残された探究の途は試行錯誤という全くの幼見的行動あるのみである。しかし夢は楽しい。生きがいを感じるのである。

俳人千代女の心に詩情を湧かせた、あのアサガオに無上の愛着と魅力を感じる。こんなことに結びつけて、千代女の観察眼の良さを賞賛したりするのは、詩情を無視した思い過しであろうか。

## ヤマメの産卵数と食性の調査

種 口 繁 一

ヤマメ *Oncorhynchus milktschitsch* は美しい斑点のある魚で溪流の夏も水温の低いところを好むものである。丹波地方では水上郡神楽村(加古川上流)と多紀郡後川村(武庫川上流)のみに知られている。昭和27年8月、多紀郡後川村(神戸市水道千刈水源池の上流15 km.)でヤマメ(大島博士のアマゴ型)を採集する機会を得たので、その産卵数と食性を調査することが出来た。幸い産卵期の直前であつたので抱卵数を数えることが出来た。

(個体) (体長) (卵数) (右卵巢) (左卵巢)

a	28cm	158	102	56
b	26	225	90	135
c	22	210	110	100

(個体) (体長) (卵数) (右卵巢) (左卵巢)

d	201cm	91	100	91
e	15	143	60	83
f	14	116	56	60
平均		191		

今迄記録された産卵数に比較して非常に少い事は注意すべきことである。

次に食性は胃を開いて見た。採集後直ちに胃を採り出し両端を糸で結んでホルマリンに漬けて持帰つたが多くの個体は空になつていた。数個体について次のものを見た。ノラハナアブの幼虫、クロツチバチ、ハラビロヘリカメムシ、ヒメバチ、アメイロバチ、クロヤマアリ、ヨコバイ等が見られた。

## 珍しい淡水クラゲ

大正10年三重県津市の古井戸から発見されその後、古井戸は焼失して了つたと思われた。日本特産の淡水クラゲが伊丹市緑ヶ丘、伊丹池に於て大阪学芸大学木村桂三君他によつて発見された。

同池の水深5 m、水温20°Cで水はよく澄んでおり、その中に直径1.5~2 cm位のクラゲが点々と泳いでいるのを発見。このクラゲは半球形より扁平に近く無色、放射管は4個あつて、触手は4の倍数で中空、口唇も4個ある。(毎日新聞 Oct. 23. 1952)

このクラゲは兵庫県に關係の深いもので、皆て姫路

師範の博物科教諭であつた西本俊雄先生が三重の津に在職中、大正10年に発見されたもので学名を *Limnocodium iseanum* と言う、傘は半円形より低く扁平其の後火災のために絶滅したと思われた。それが又本県で発見された。西本氏は昭和13年から北海道の帯広中学校長に転じ其の後道内の校長を歴任、終戦後、郷里揖保郡太田村で余生を送つておられる。

同先生と酒席で漕うと、備前クラゲではないが酒の肴(?)に何時も生物屋(失礼)らしくなつて手柄話に花が咲きなつかしい。(室井紳)